

大野川 (1)

—その歴史社会的考察—

富来隆

(大分大学助教授)

(目次)

- 一、はしがき
- 二、流域の自然的環境—ムレとツル—
- 三、流域の歴史的背景—緒方水軍衆— (以上本号)
- 四、流域の社会的構成—農村と漁村—
- 五、流域の経済的發展—広域都市圏—
- 六、むすび

一、はしがき

われわれ現代の社会に生きるものは、究極的には現代を知らねばならない。しかし社会生活における諸現象は元来が歴史的現実の部分であり、歴史の生成過程のうちにある。その意味では、社会文化の研究はその一面においてきわめてつよく歴史社

社会学の性格をもつものである。社会学が歴史的社會をその研究対象としてもつものであることはマルクスやウエーバーをふり返つてみればよくわかる。そしてなによりも古典的な意味において、経済学が経世済民の学であり Political economy とよばれるのとよく似て、社会学は Historical sociology の性格をもつのである。私自身としては、もつぱらマックス・ウエーバーに依拠しながら、「生産技術の社会的影響」の問題を歴史社会学の立場から追求していこうと考えており、この願いはすでに久しいながらなかなか熟するを得ないでいる。二豊の地域における問題の一として、宇佐八幡宮および緒方氏さらに大友氏にもかわる瀬戸内水軍（古代～中世）の研究のことについては、永らくの夢としてとどまつたまま軌道にのらずにいる。また農村と都市との構造的連関（近世～現代）の追求も同様久しい夢であるが、これらの課題はいつになつたらはたして実現し得ることであろう。本稿もまた、究極的にはこれらの課題にせまろうと意図するものであるが、なお準備の足らざるままに、いまは大体の構想を記すことになりそうである。

目次の三にかかげた「歴史的背景」の主題たる緒方氏について一言しておく。セト内水軍の歴史的活動を研究するためには、まず古文書・記録の類を主とし、これに遺物や土俗資料などもあわせて問題の核心に直接せまつていくべきことは、あらためて言うまでもないところである。だが元来現地に存すべき文書・資料は意外に少なく、かつ思わぬ制約がある。そしてまた私なりの生産技術の社会的影響を主とする考察のいき方は、まず「自然と人間との関係」を主軸とし、そして「人間と人間との関係」を展開させていこうとするだけに、むしろ右の空白を埋めて問題に迂回的に接近する方法をとることになる。ここに私としては、盲目蛇に怖ぢずの感を抱きながらも、つぎのようなことを考えて調査研究を試みてきた。

その第一の方法として、瀬戸内海の海上交通について、その自然的条件としての内海潮流をしらべ、その利用のしかたを实地について考察すること。

第二の方法として、彼ら水軍衆の貿易品目の内容について、また生産技術上の問題とからんで、真朱・銅鉄・工芸品などの現地における資源と産業を探求すること。

第三の方法として、彼らの占取した生活本拠地を現地について調査すること。ここに宇佐八幡系の水軍衆は豊前から国東半島にかけて、諸河川の流域ならびに内海の沿岸に分布しているのに対し、緒方氏の族党は主として大野川・大分川の流域と豊後水道の沿岸とに蟠踞している。このことよりすれば、これは水軍衆の常住的な占拠地域性の問題として問われるべきことであるとされよう（本稿においては、この第三の問題を主として考えてみたい）。

右の三つの問題は、そのいずれもが第一義的に「自然と人間との直接的なかわりあい」においてあり、その意味からして生活文化の最も基本的な問題として出発するものである。要するに、彼らが水軍衆として活動し得べき自然的条件として考察するべきものである。

さきの第一の方法として追求しはじめた内海潮流とその利用とを「自然と文化との関係」として図式的構成を試みようとするとき、①それが日本社会の史的発展のうえに、如何に全般的に大きく作用しているか、②図式化に際しては、自然条件が優越する往昔にさかのぼるほどそれが強くはつきりと現われているから、先史古代ほど端的に把握しやすいのではないか。この二つの問題が私を強く引きつけた。大学時代以来ずっと学びつづけて来たマックス・ウェーバーの、比類まれな類型構成の発展図式の手法が、つねに私をしてまず「自然と人間との関係」および「人間と人間との関係」における基本的な図式をえがいてみる方向にひっぱつた。しばらくこれをふり返つてみることを許したまえ。

セト内海の海上交通を知るために、その自然的条件としての潮流の実地調査にしたがうこと。そのために県南の蒲江（豊後水道）からはじめて、県北の国東半島・姫島にいたるまで、沿岸各地の漁村をたずねて歩くことが最初の出発であつた。さらに関門から周南（中国地方）と西伊予（四国地方）とを訪ねることがつぎの仕事となつた。そして内海潮流の分岐点であり、漁師が一本釣りに従つている姫島において、この調査はどうやら目途するものを得るにいたつた。

瀬戸内海に出入する潮汐の量は、ほとんどその三分の二が豊後水道によるものであり、残りの三分の一が紀伊水道をとおりるのである。関門海峡はマイナスに作用して、内海の潮は洞海湾にいたつて日本海流と出会うのである。そして外洋の海流（一

方的に流れるもの」とは異つて、セト内海の潮流は潮の干満によつて作り出されるものであり（出入が逆に流れる）、したがつて特殊な規則正しさをもっていることが分る。満潮の始ツギガリ・中ツグ・終ツグ、干潮の初ツギ・中ツグ・末ツグ、この干満が一日に二回づつ、その周期は一潮分十五日をもつてほぼもとに戻る。したがつて 12×15=180 枚の基本潮流図が作成される。これに四季折り折りの風向きを利用し、また沖合の本潮と沿岸の逆転潮流とを利用することによつて、海上交通がなされるのである。内海潮流の規則性は、他方で複雑な島嶼や瀬戸によつて、地域によつてすこぶる多岐であり、関門海峡のごときは「一日に四十七回、潮の工合がちがう」と言われるほどである。がしかも、この内海潮流の規則性とそれを利用した海上交通とは、沿岸各地に港津を発達させるとともに文化圏の形成に大きな関係をもつに至る。それらはまた各地の文化遺物や伝承・習俗などに大きな影響を与えてくるものと考えてよいであろう。

要するに技術文化の発達程度は往昔にさかのぼるほど低次であり、したがつて内海潮流の規則性という自然的条件はまだ技術の幼稚な先史古代にさかのぼるほど強く作用したであろう。とすれば、「自然と文化との関係」をまず自然的条件（ここでは潮流）を主とする基本的な図式の設定から出発して、それがどれだけの限度で作用しているかを古代から現代にいたる文化発達の各段階において、その関係が次第に変化・複雑化していく過程を因数的に明らかにしていくことが、歴史的社会的実相にせまることとなるであろう。（その最初の発表は、本誌の創刊号に「西船東馬―日本史における地域性―」昭和29年10月と題した小論である）。

大学で社会学の講義を担当し、農漁村の調査をつづけているうちに、潮流と交通を主とする西日本の社会文化と、ほぼ名古屋・岐阜を境界とする東日本のそれとの地域的相異は、ますます強い印象をもつて私を捉えてきた。考古学や人類学・言語学・民俗学などにおける文化圏・地域性の考察は私を勇気づけてくれた。戸谷敏之氏による東西日本の農村構造の地域性の設定は、マックス・ウェーバーの東西ドイツの社会構造の相違を明らかにした類型構成に触発されたものであり、古島敏雄氏また農業技術史を軸として地域差を追求している。現代農村の構造については山田勝次郎氏が、東西日本の地域差を发展阶段を示

すものとして提えている。これらの成果をふまえながら、私としては「自然と文化との関係」を潮流と交通を軸として考察していこうと試みたのである。そしてそれが先史古代において（技術の発達はまだ幼稚なゆえに）まづもつとも端的に示現される筈だと考えて、そこに基本的な図式化を行なおうとしたことから、つい考古学上の諸問題に深入りするところとなつた。そしてまた図式の高度化を試みるうちにいつしか女王翠呼の魔呪にとりつかれたらしく、おもわず邪馬台國論に精力を費やしてしまうこととなつた。しかし私にとつて、それらはいくまでも「自然と人間との関係」そして「人間と人間との関係」の質的な図式化の追求にほかならなかつたのである。（これについては小著「邪馬台女王國」（関書院刊、昭和35年2月）のうちに随所に明らかにしたつもりである）

しかしこの間にあつて、一方に「大分県史料」の編集にしたがうを得た関係から、中世社会の問題にも絶えずひきもどされていたことは、社会構造の地域性を発展的に考えていくうえに何よりも幸いであつた。編集同人の渡辺澄夫教授・中野幡能教授がともに近畿と西日本莊園の研究をつづけていられることは大きな力添えとなつた。そして他方にはまた、筒井清彦教授から「大分県政史」および「大分市史」において現代の経済史を分担するように指示を与えられて、焦点を都市の産業にしほりつつ調査の強行軍にしたがつた。これらのお蔭で、古代から現代までをゆきつもどりつしながら、そうすることによつてむしろ、私なりの歴史社会学の構想が次第に形をととのえて来たのである。

「自然と人間（文化）との関係」を、生産技術の側面を軸として類型化し図式化しながら、それによつて社会の発展を明らかにする試みは、それが先史古代においての単純さから次第に複雑な現代におよぶこと、その際に質的要素に量的関係を加えていくことによつて社会文化の特殊相をよりの確に把握するべきことであつて、これは社会科学の方法論的基礎の問題として考えられるのである。マックス・ウェーバーが提示したように、量的変化から生れる質的な相違に敏でありつつ、なおかつ質的な獨特性をもつ諸々の文化相への量化的接近および理念型の利用によつて、もつて重層的な特殊な歴史的情况に接近することが出来るとする比較社会学の手法（マックス・ウェーバー「宗教社会学論集」第一巻）が、私にとつての座標軸だからによ

るものであろうか。

社会文化の進展を技術史的な視点からして、まず「自然と人間との関係」において捉え、そのうえに立つて「人間と人間との関係」を考察すること、これは本稿においても同じくするつもりである。

二、流域の自然的環境

九州の中央部に高く火を噴く大阿蘇、その東に聳え立つ祖母・傾の峻峰、そして北には久住・大船などの九重連山。これらの高峰にC字状にとり囲まれて、その山麓から流れ出す数多くの清流を竹田盆地にあつめ、東流し北流しつつさらに多くの支流を合せて別府湾にそそぐ大河、それが大野川である。

その流域の面積は1,455km²におよび、灌漑面積は99.0km²にたいする。九州一の高峻をほこる祖母山(1,768m)の西麓に源流を發して、それより多くの支流をあつめつつ鶴崎の河口にいたるまで、その全長じつに130kmと言われている。地図によつてその支流名をかぞえあげ得るものだけで六〇に達し、すべての支流・小支流を合すればおそらく二〇〇以上にのぼろう。

いまそれら支流の主なるものを上流からたどつてみる。豊日肥三国の境にそびえる祖母山の西南麓に發する大野川の源流(宮崎県)は、神原からの支流を津留で合して高群(高森町)の西を北にと回流し(熊本県)、白水において大分県に入り、これを大谷川とよぶ。それより北流してまず岩戸川(山崎川)を合し、ついで西の阿蘇山東麓から東流する藤渡川・滝水川・吐合川・矢倉川などの支流をあつめる玉来川を合し、さらに北の久住山南麓から南流する久住川・神馬川・潤島川に家古屋川・産山川をもあつめる稲葉川を合して竹田盆地に集中する。ついで濁淵川を合して竹田をくだつて縮方盆地にいたる。ここに南に祖母山の北麓に發して北流する神原川と瀬ノ口川に、十角川・徳田川・馬背戸川の水流をあつめる緒方川を合し、またくだつてその東に嶺山麓に發する奥岳川・九折川に中津牟礼川・奥畑川をあつめる奥嶽川を合し、また北には市万田川・酒井寺川・

田代川をあつめる平井川を合し、さらにくだつて南からの内山川・松尾川・吉田川をあつめる三重川を合する。さらにくだつて犬飼町にいたつて、東には南から須久保川・三重谷川・越路川・仲野川などをあつめる野津川を合し、西には茜川および柴北川を合して北流し、東から吉野川を、西からは畠仁田川・佐渡川などをあつめる河原内川を合して、さらに玉泉寺川と長谷川また立小野川・米良川・高江川をあつめる判田川などを戸次盆地に合する。そこには東に戸次古川が存して大雨には街なかを洗い、またその東に北流する佐柳川および大内川を合しつゝ鶴崎にいたる。そして西に旧河たる乙津川を河口に合して別府灣にそそぐのである。またはるか以前にはやはり河口原であつたらしいが、いまは台地上の小河川たる丹生川が東に、西には二目川が寺崎川を合して原川となつて、いずれも別府灣にそそいでいる。

その水源は日向・肥後・豊後にまたがり、その長流は直入郡・大野郡の全域をつつみ、大分郡と北海部郡の境を流れて別府灣にそそぐのである。その全長・支流の多さなどにより、まことに流域の総面積が広く、大野川たるその名に恥じないものがある。

大野川の水系は右のごとくである。

その源流から河口にいたるまで二〇〇余に上る支流・小支流をあつめつつ長河となることによつても知られるように、この川の流域の山系はまたまことに厳しいものがある。

上流において祖母・傾(南)と阿蘇(西)と九重連山(北)とが、C字状にとりまいて周辺と隔絶する。中・下流においても、その西北部の大分川との間には亀岳・男岳・鎧岳から雲青岳・御座岳、さらに障子岳・本宮山・霊山などいづれも六〇〇〜八〇〇mの山々が連々とつづいてその境を絶している。またその東南・東部の南・北海部郡(豊後水道域)との間にも、柏山・大石岳・酒利岳から佩楯山・楯城山と七〇〇〜八〇〇mの峻峰がつづいており、わずかに野津・吉野の間において豊後水道の臼杵市に通ずるが、それもふたたび九六位山などの縦ノ木山系によつて隔てられるのである。

これによつてみれば、大野川流域の自然的環境は文字通り々山はへだて、水はむすぶのであつて、この川の流域が小盆地

を中心とした分化を示しながらも、なお全体として一つのつながりをも、つ小世界たらんとすることは、けだし自然の勢とも言うべきであろうか。

ここに「自然と人間との関係」それによる「人間と人間との関係」を考察するにあたって、まず人間生活の本拠地占取の自然的条件としていかなる地点がえらばれたかの問題からすすめていくこととする。

(1) ムレとツル

ムレとツルという地名が見られるのはなにも二豊の地にかぎつたことではなく、ましてこの川の流域にかぎつて存することではない。しかし大野川の流域における集落の地名として、やはりムレとツルの語のつくものが頗る多いことが目につく。しかもこれが朝鮮古語に由来するものと思われるだけに（南方語だという説もある。それもよいだろう）、その古さにおいて、「自然と文化との関係」を追求するうえにまず基本的な条件をもつのではないかと考えられるのである。

いまこの流域におけるムレとツルのつく地名を五万分の一地図によつて追つてみると、ツルの地名はほとんどすべてが水流に近く存在するのに対して、ムレの地名は必ずしもそうではない。というよりもムレの方は山懐に抱かれた土地がらであることに気付くのである。ことに集落名のムレとは別に、県内到处ところにムレの語がつく山名が多く存することは、右の事情を裏書きしてくれるようである。（猪群山・松群山・騎群山・熊群山、樺牟礼山・花牟礼山・乙牟礼山、また角埋山、さらに大村山など……）

いまムレとツルと呼ばれる集落について、地図によつてその大略をぬき出せば左のように多く見られる（それ以下の小字名・呼名などを加えれば相当の数にたつすることであろう）。

(ムレ) —

大野川源流の大谷川（熊本県）においてコーラ（神原）と高群と津留・上津留が存するが、大分県に入つてから、緒方川と合する付近に高

牟礼があり、緒方川支流の徳田川に室鶴が、馬背戸川に大無礼が、久住川に室がある。中津牟礼川が奥畑川と合するところに中津無礼があり三重から千歳村に境するところに牟礼がある。犬飼にそそぐ北川と茜川の間田口山の北麓に高牟礼が、野津市と犬飼の中ほどに於無礼がある。戸次にそそぐ川原内川の上流に中無礼がある。

(ツル) ー

ムレに比べて、ツルは非常に多い。大野川上流の支流山崎川に鶴迫・天神鶴が、玉来川に鶴原が、稲葉川に添津留が、久住川に北尾鶴があり、緒方川には大津留が、十角川には榎津留・鶴ノ口・桑津留が、徳田川には室鶴が、奥嶽川には宮津留および津留があり、緒方川が大野川と合する近くの高牟礼付近に中津留・下津留がある。平井川に津留が、中津牟礼川に八坂津留・中津留があり、奥畑川に小津留がある。犬飼町近くの下つて津留・釣戸があり、北川には上鶴が、吉野川には東津留・桑津留・志津留があり、戸次町に中津留があり、下戸次には尾津留がある。鶴崎に入つて大きく曲流するところに大津留および大鶴があり、河口は鶴崎である。

ムレについて少しく述べる。

ムレの語が朝鮮古語に由来するものであることは、かつて金沢庄三郎・宮崎道三郎・中田薫諸博士によつてすでに明らかにされたとおりである。そしてそれが山を意味し、また村(ムラ)を意味するものであることは、まさにわが大分県においても右に記したごとく多数の地点に現実存在するのである。これによつてみれば、これらのムレとよばれる村が、意外に古い時代から集落としてひらかれていたことを推察してもよいようである。

これらのムレをその現地について調べ、それらに共通する自然的・地理的条件を見出していけば、彼らが生活するための条件として選定したもの、すなわちそこについて村を形成するに際しての基本的な条件を、私のいわゆる「自然と人間との関係」の始源的状況を、それによつて明らかにする手掛りの一つがつかめるものと思われる。

大野川流域のムレなる村について、私自身が現地をたずねたところはわずかに二、三にとどまる。そしてそれも他のことに

ついで調べるためであつたから、ここにその自然的・地理的条件について述べる自信はない。わずかの記憶によつてこれを言うことはなほ危険であるが、いまはこれを許していただきたい。なだらかな小丘にとり囲まれて孤立した、あるいは山裾の小さい村という印象だつた。そして現在の交通の状況からは取り残されるような入りこんだ地点になつてゐること。またそれだけに大集落に發展するような地形的な余地の乏しいところ。稲作経営をするにも一戸平均二、三反にすぎないような(周辺に自作すれば別であるが)山陰の集落。しかし湧水は浅くかつ清澄で、用水(飲料ならびに灌漑)には恵まれていたという印象がある。以上のようなことが断片的に思い浮べられる。

しかし県内外いたるところに、ムレ(無礼・牟礼・群・埋・村などの諸字を用う)の呼称をもつ山名および集落名がかなり数におよんでいることによつて見れば、わずかな記憶による右に述べた自然的・地理的条件は、必らずしもムレ村の実態をすべて示すものではないであらう。あるいはもつとも重要な問題を見落しているかも知れない。ことにムレ山が人間の生活に密接な関係があるとすれば、いま現にムレ山の麓近くにムレ村が残存しなくても、かつてムレ村が存したということは多分に考えられるからである。またモリ(森・守・杜など)と名のつく村も同じ性格のムレ村であろうとすれば、これについても調査をすすめなければならぬわけである。(後述のように、角埋山の南麓にモリ・ツルが現存する)。

いまはまだ、朝鮮古語との関係からして、また現にムレと呼び名のつく山と村とがともに存在するということからして、最も基本的な生活の場としての村が、山に關係するところの強さだけは感じとつていただけたものと思う。ムレ村、またモリ村については、つぎに述べるツル村とともに、今後一、二年を現地について仔細に観察し検討して歩くつもりでいるので、また他日を期したい。

つぎに、ツルについて少しく述べる。

ツル(津留・都留・鶴・弦・釣などの諸字を用う)の呼称をもつ地名は、大室管内志によると「筑紫の方言に、広き田地

をさして都留というなり。なりはひの事に付て、田地に行くをツルニユクという」(豊後・直入郡の条)と記されてある。当地で地名研究に精進されている染矢多喜男氏の御教示によると、川にそつた小平地をさすとのことである。ところでまた安部一郎氏に伺つたところによると、朝鮮語ではあそこの毛のことをいうのだとのことである(これによると芋や瓜のツルは、その関係語のように思われる)。

ツルの地名が、ムレの場合と同じく朝鮮古語に由来するものであり、それが川の流れに關係の深いものであらうとする私の推測は、両氏の御教示によつてほぼ満足するを得たとされよう。おそらく言葉の本来の意義からすれば、ツルとは川岸の湿地帯の謂であり、ヨシやアシの生え茂る川岸近くの陰湿の地をさすものであらう。とすれば、この川岸の濕原(空閑地)が水田化されていつたのは、おそらく後代のことにかかるものであらう。いま大野川および大分川の河口に存するツル崎(大ツルの地が少しく上手に二ヶ所ある)および今ツルの状況、また戸次の中ツル河原の状況などよりすれば、右のごとくに考えてはば間違ひあるまい。そしてツルは本来的には、狩りや漁に好適の場であり、また渡シ場として恰好の地でもあつたであらう。それは、ミナトが元來は潮の流れによる砂浜を利用したものであり(築堤や浚渫による港は近來のことである)、ただ砂浜がありさえすればミナトたり得た(このことは飯塚浩二氏著「人文地理学」にくわしい)のと考えあわせるときに、ヨシやアシの生え茂るツルの地は、渡船場として好都合であつたことを知るのである。

ヨシやアシ草に鳥類が舞いおりの状況にあるツルの地が、狩りと漁とに好適であることは当然の謂であるとして、それが水田化されに至るとすれば、それは無田とよばれる地と同様な自然的条件をもつこととなるが、それが朝鮮古語である違ひにすぎないかどうかについては大いに疑問がある。ツルはあくまで川岸における湿地であつて、大宰管内志の説明に見える状況は後代のことにかかると思ふのである。

ツルの呼称がムレの場合と同じく朝鮮古語に由来する地名であるとすれば、それならばなおそれとして、言葉の本来の意味

に基づいて解釈がなされなければならないであろう。

そうだとすれば、ムレがもともと山に関係ある村として出発したのに対し（農村）、ツルは本来的には川に関係ある村として狩・漁と渡船とに好適な地として出発した（漁村）という解釈は言いすぎであろうか。右のような私の考え方がきわめて素朴な対置法的発想法だとは思ふ。しかしコトバの本来的な意味において解すること、また基本的な図式化を試みていることを理解していただきたいと思う。ムレが農村的性格を有する村であり、ツルが漁村的性格を有する村だとするのは、類型化への想定であつて、いまはまだなんら実証的な証拠にもとづくものではない（あるいは弥生式土器がそれを明らかにしてくれるかとも思う）。ただししかし、このような性格を強く有する村だと解することはほぼ正しいとされるだろうと思う。そして私にとつては、これらの村が後代において、ことに緒方水軍衆の活躍した時点において、いかに彼らの地域占取性（自然的条件としてのそれ）に関係するところがあるかをさぐる手掛りの一としたいのである。

(2) 地域性の問題

地域性の問題は、いわゆる文化圏として文化の伝播・交流を主として取り扱われる場合が多い。しかしここでは「自然と人間との関係」を自然的条件を主軸とし、これにかかわる技術・文化がどのように地域性をもつて現われるかに注目して考えてみたいのである。ムレ・ツルの村が生活の本拠地の占定に関しており、この場合には自然的条件が明らかに優位である。このことは当然に先史古代の占地条件として現われることであろう。

それゆえ、ここには、それらの地域を少しく拡大して、大野川流域を見わたしてみたいと思うのである。もちろん、だからといって大野川流域にのみかぎられた自然的・地理的条件をもつものとするのは非常に難かしい。それゆえに、あるいはより広域な文化圏の一環として形成されるもするであろうし、あるいは自然資源に関していえば、また局地的な様相を呈することもあるであろう。しかし何といつても大野川（その本流ならびに支流）が、川という特性において、つねに水流を一定の方向に

たもちつづけていることよりすれば、少なくともこの川の流域を一つのものとして出発して「自然と文化との関係」をさぐる手掛りをもとめ、それを実態によつて類型構成して、もつて「人間と人間との関係」において捉えることに努めるべきであろう。(これは心がまえの問題であつて、記述以前のことには属するかもしれないが――)。

(4) 先史文化の地域性

大野川流域には先史時代の遺跡がすこぶる豊富である。それらの遺跡から地域的性格はいかように考えられるであろうか。まだ文字・記録のないこの時代の文化的性格を示してくれるものは遺物である。遺跡の発掘および遺物の研究は、それだけに重要な意義をもつ。しかしすべての遺跡を発掘によつて調査することはできないし、文献のないあるいは文献と直接には結びつきにくい先史文化であるだけに、その研究はともすれば分類学にとどまろうとするおそれがある。それゆえどうしても文化人類学・比較民族学や経済地理学・比較社会学などの多方面からの協力が必要となる。また数少ない遺物から社会文化の進展を考えていこうとするとき、私たちにはことに技術史的な視点が要求されてくるのである。

先史時代は、また技術文化の発達が幼稚であり、それだけ自然的条件がすよく作用した時代であるだけに、地域性との関連もまた自然的条件が大きくはたらくのである。したがつて一つにはこれを通して文化的なものに転位させる方法をとることが出来るし、また一つには技術そのものから文化の相を考えていくことができる。この両者は密接にかかわりあいながら進んでいくものであるが、やはりいちおう峻別して考察をくわえるべきものであろう。

ところで昨年旧正月墓参の折りに、大野川河口域の丹生台地でまず多量に発見し、また対岸の高田台地(高尾・明野地区)でも数多く採集されて、学界に波紋をなげかけた前期旧石器風文化の問題は、その後さらに石器採集の数をますますもに、その形態・技法において、それらがインド・ジャワなどの南・東南アジアの文化と強い類似性をもつこととあわせて、東アジアの中国文化ともきわめて親近性を示すことが確かめられて来た。またなかにアフリカ・ヨーロッパのオルドヴァイ文化

やハイデルベルグ文化なども似かよつたものも多く見出されている。それと同時にまた当然のことであるが、この丹生・高田地域に独自性を示すと考えられるべき石器もかなりの数にたつしている。それが昨秋十月の発掘によつても、石器の出土する地層（シルト層）がはつきりと確かめられたこととあわせて、一方には地質学・地形学からする協力によつてもまた、これらの石器が旧石器時代の前期から中期にかけての文化相を示すものであることが明らかになされたのである（これらの石器を縄文時代早期のものだとする考古学者もまだ見られるようであるが、そういう人々も、もし石器出土の地層を实地について調べ、石器の形態・技法などを実物によつて考察されれば、おそらく右の疑いは氷解するであろう）。また、かつて高田台地の北端の鶴崎層（シルト層）から *Stegodon orientalis* の臼齒が発見されたこともあり（現存）、したがつて古生物学からの協力も進められるようになることであろう。

丹生および高田の旧石器文化に見られる石材はまことに多種にわたつているが、なかに祖母・傾の北麓に流出するホルンヘルスや安山岩・凝灰岩などによる石器がこの両台地にみられるのに対し、九六位山系に産出する石英岩による石器は丹生に多く見られて高田にほとんど見ないのである。前者については水流によつて運搬されたものと考えてよいであろうが、それだけに今後の地域性追求への手掛りとなるであろう。後者については局地的性格を考慮して検討がすすめられなければならないものと思われる。

くだつて、いわゆる中石器時代（無土器文化）の遺跡は戸次・犬飼からさかのぼつては三重・朝地・竹田にも発見されはじめているが、やはり安山岩・凝灰岩・ホルンヘルスが多く、当時まだ黒曜石の使用は見られない。くだつて縄文時代早期の遺跡になると、大野川流域においても近時とみに発見例を加えつつあり、黒曜石の利用が多量に見られはじめ。これら石器の材質によつて文化の伝播（文化圏の形成）の一端を考へることも可能であるが、それがはたして文化の交流を伴う地域性を示すものとしてますます考へてよいかどうか。しかし全日本的な視野において研究が進んでいる現在、これらの時代における自然的条件の究明は、おそらく「自然と人間との関係」を本源的にかつきわめて *Vivid* に示してくれる日が近いこと

だろうと期待されるのである。

さらにくだつて、弥生時代ともなると遺跡はばくはつ的に増大する。加えて石器・土器のほか金属器や木器類などの実例も増加しており、ここに至つては広域文化圏の設定・きわめて強い地域性の形成など、社会文化の様相が次第に明らかとなつて来ている。「自然と文化」とに関しては、ムラ、生活の一端を知る好材料として、例えば名草台（玖珠郡森町）の遺跡などがあげられる。先へのべた地名のムレ・ツルも付近に存する。角埋山（ツノムレ）の東南麓から青銅器4が出土しており、南麓にひろがる名草台の中央には、千人塚を中心として南北に連なるカメ棺・石棺の大群列が存していた。そしてこの台地の縁辺部には、東にモリ（森）、西北にツル（志津里）があり、また南端にツル（十ノ釣）が玖珠川近くにあつて、これらに住居址群の遺跡が存在しているのである。このことは、私たちにあらためて種々の問題を考えさせる。

さらに古墳時代ともなると文献上の問題とも交渉が深くなり、大和王権による日本統一の進展ともからみあう。大野川流域もこの例にもれない。流域には小盆地が多いだけに、古墳も「群」として見出されるものが多いが、同時にそうでないものについての問題も考察されていくべきであろう。これらの遺跡についてのこれまで考古学の側からする調査の報告は、今後とも十分に尊重されなければならないであろう。

さて、先史時代は時間的にすこぶる長期にわたり、社会文化の進展もその前後においてすこぶる異つてゐる。これについてすべてを同様にとり扱うことは当を得ないであろう。しかしその各段階についてみれば、その文化の「地域性」の問題は、それが大野川流域を一つの単位として考察することはきわめて難かしいが、やはり自然的条件がつよく作用した時代であるからその傾向は多分にあり、かつ「自然と文化との関係」を図式化して類型構成を試みるにはすこぶる都合だとされよう。

このことについて、私なりの歴史社会学の立場から丹生の真朱をめぐつて「自然と文化との関係」の図式化を試みた小論をものしたことがある（大分大学々芸部紀要「古代社会の聖地」昭36年3月刊）。そして阿南郷（大分郡）および入田郷（直入郡）についても同様に考察されるだろうと目下調査をすすめている。三重郷にもまた右のごとく図式化して考え得べき自然資

源が存するのである。しかしいまこれらについてまとめるにはなお調査が不十分であるので、ここにはしばらく省略したい、さきを急ぎたい。

(四) 伝承における地域性

地域性ということを示す文化現象の一つとして、伝承の分布について考えてみるのも有用なことであろう。たとえば諸国の風土記のうちには大和朝廷との因縁をしめす説話が見られ、かつそれが因々によつて異つていくことは、すでに明らかに知られているとおりでである。この際、豊後ノ国の風土記においては、景行帝による征西の物語りが圧倒的である。その説話とむすびつけて自然の景観や古墳の遺跡などを、直ちにそれとして考えることは誤ちをおかすものになることが多いと言えるけれども、この説話を地点と線とに限定して考えずに、一つの地域的なひろがりとして重層的なつながりをもつて考えれば、あるいはまた何らかの意義を見出し得ることとなるのではないかと思われる。

いま大野川流域から豊後水道の地域についてみれば、幾つかの特徴ある伝承を拾いあげることが出来る。

その第一は、神武帝の東征にかかわる説話であつて、天皇の経路が日向→佐伯の山路(番匠川流域)と佐伯→佐賀ノ関の海路(豊後水道)にしたがつたと伝えられている。

その二は、景行征西の説話であつて、天皇が速見・別府を経て大野・直入郡に入つたとされる、大野川の上流北域である。

その三は、真野ノ長者(炭焼小五郎)の伝説にまつわるものであつて、三重から臼杵・坂ノ市方面にかけての大野川の下流域である。

そして第四のものとしては、豊後水道沿岸(南・北海部郡)・大野郡から國東半島沿岸にひろがる犬神・蛇神信仰の地域である。これは弘法大師とむすびつく説話であり、同じく犬神・蛇神の信仰であつても伝承の内容としては伊予からセト内沿岸にひろがるものとはすこぶる趣を異にしている。

ついで第五として、緒方氏の發祥をめぐる花ノ木姫の物語りであつて、祖母山を中心として周辺の地域（豊後では直入郡）に分布する。

最後に第六として、僧日羅の作と伝えられる仏寺（石仏も多い）が、この流域一帯にひろがつている。これは豊前から國東半島（六郷山）にかけて仁聞の作とつたえられる仏寺がひろく分布することに対してきわだつた対照を示している。そして仁聞伝説が宇佐八幡にかかわると考えられるのに対して、日羅伝説は緒方氏の勢力とかかわるものであらうと考えられている（この第六は、仏教文化の遺物¹ 仏寺の造立と関連をもつ伝承であつて、いわゆる説話・伝承にぞくする他のものとは少しく性格が異なるが¹）。

以上とくに目立つたものを拾ひあげたが、これらが時代を異にし内容を異にするのと、また分布する地域を異にしていることについては、考えてみるべき価値があるように思われる。右に記した六つの伝承の一々についてみれば、①あるいは文化圈説の方法にしたがつて、伝承の各地点における小差を比べながらこれを文化の伝播としてとらえて、それを歴史的次元に再構成していくことも一の重要な解釈であらう。しかし、②それらが伝承を主とするものであるだけに、ここではそれぞれの伝承の地域的なひろがりをむしろ一の単位として取り扱い、それによつて歴史的な文化の特殊相を考へてみることも有用ではないかと思われる。右のように伝承の一々についてこれを考へる方法のほかになお、③これらの伝承を一まとめにして当地域における重層的な文化相を示すものとしてみていくことは許されないものであらうか。あるいはそれによつて大野川流域（それに豊後水道域）の地域性・特殊性をよりはつきりと浮き彫りできることも考へられるのではないだらうか。もつともこの重層的な考察は私自身なお模索の域を出ないのであつて、他日を期すほかはないが。

ところで、これらの伝承における一の特色と目されるものとして、運動の方向に共通性が存することをあげておきたい。景行征西の説話をのぞく他の場合は、それらが南から北へ・上流から下流へと指向しているように見うけられる。景行説話のみは、その反対である。これは景行説話が、他のそれらとは異質的なものであることを示す一の証拠だとは考へられないであらう。

うか（景行説話がきわめて軍事的・政治的な性格がつよいのに対し、他の説話はむしろ社会的・文化的な性格がつよいとしてはどうであろうか）。景行征西以外の他の説話について考えてみると、その内容の異なるのに拘わらず、また地域のひろがりの異なるものにも拘わらず、それらは潮流と交通と文化を軸として展開して来たものであるらしく思われるのである。豊後水道がセト内海の門戸を扼するものとして、日本社会の史的発展につよく関連し、それに諸他の要素が加わることによつて、地域化現象をも伴なつていと思われるのである。

たとえば、三重郷内山に源を發するとされる炭焼小五郎の伝説についてはすでに柳田国男氏によるすぐれた論者があるが、そういう伝承を生み出すだけの自然的条件と社会的条件が、この地域にあつたものと考へてみたらどうであろうか。そうでないとしても、少くともこの地における「自然と文化との関係」をさぐり出すことは、それはそれとして地域的性格を知るためには有用なことであろう。あるいはまた犬神信仰のことについて言えば、それが近世農村においていかなる家格を有するところに現出していたかというような問題もあろうけれども、その伝承自体の内容に即して考へていくこともまた必要であろう。犬神が弘法大師の唐よりの帰国に際して、そのお伴としてこの国に來り、大師の脚のうちより稲をくわえ出してまいることがこの国に稲をひろげるもとなつたという伝承のことなどは、中国大陸南部からする民族の渡來が、犬をつれヒョウタンや稲を伝來したものとされるだけに面白く、かつこの信仰が豊後水道の海部郡の地方に分布することとあわせ、あるいは神社の祭祀や考古遺物などにもそれと関連あるらしいものが見られるだけに貴重でもある。これらのはたして一体的なものとして歴史の実証に堪え得るものかどうかは、いまは問わないでおく。いずれにしても、ここに記したような伝承の一々について、それはそれなりに研究を深化することは当然に重要なことである。

これら大野川・豊後水道の地域にひろがる説話・伝承を、当地域における「自然と人間との関係」のうちに図式化してとらえることは、またかえつて「人間と人間との関係」を明らかにすることとなるであろう。

なお第六のものすなわち日羅の作と伝えられる寺法（石仏も多い）については、これが伝承を主とするものではなくて文化

遺産を主とするものであり、それが日羅の作にかかると伝えられるのであつて、第一―五の伝承とは性格を異にしている。しかし、なお、その伝承が日羅の作として一の地域性をもつて分布するだけに注目されねばならない。ことに豊後磨崖仏の豊富さと優秀さについては、すでに早くから注目され研究がつづけられている。そしてこの際に、その製作年代のことに大きく関心がそがれているのも当然のことであろう。しかも日羅作の伝承がからんでいる。とすれば、その作品のすべてにわたつて一々（木彫と石仏とを問はず）について精密な測定と技法的な検討とをくわえ、それらのうちに同一人物による製作と考えられるものを類別区分していくことが、なお残された問題であるように思われる。それによつてまた地域性と歴史性とがはつきりしてくるでもあろう。門外漢の私の思いつきかも知れないが――。要するに量的な接近による特殊相の究明が有用だろうと言いたいのである。そしてそれを俟つてはじめて、日羅作という伝承の文化的・地域的性があらためてとりあげられる段階となるであろう。

以上のような数多くの伝承を、そのまま自然的条件や技術とまた文化遺産と、直線的にむすびつけることは往々にして大きな危険が伴なう。この点は幾重にも成心しなければならぬ。しかしまた地域性という一面からすれば、これら大野川・豊後水道の流域にひろがる説話・伝承を、当地域における「自然と人間との関係」のうちに図式化してとらえることは、またかえつて伝承の地域性を「人間と人間との関係」として歴史的文化相のうえに浮き彫りするよすがとなり得るであろう。

三、流域の歴史的背景

大野川の流域には、神武天皇の東征・景行天皇の征西などの伝承が存在し、大分川流域・豊後水道域とともに一の文化地域を形成しつつ発展したようである。朝鮮古語による地名が多く見られることも考えあわせ、水銀朱・銅鉄などの産出とも関連するところがあるかもしれない。しかし、歴史的事象としての地域的性格を考えるには、諸方氏一族の分布・発展を

もつてとるべきであらう。すこしくこれについて述べてみたい。

(1) 緒方氏の性格

「大分県史料」(速見・大分篇)に収められた志手文書によると、大友義鎮の時代の豊後武士団を、御紋衆・国衆・新参衆の三種に別けている。それによると、国衆||緒方一族三七家とされている。しかし新参衆||諸氏一五〇家のうちにも、右には他氏と記されているが、いま明らかに緒方一族なりと思われるものがある。また御紋衆||大友一族六二家とする中にも、大友の末葉たると同時に緒方氏との婚姻によつてその土地を司ることとなつたものがあり、その苗字を受け継いだものがあり、あるいは現に伝わる家系図には緒方氏だと明記されているものがある。そのほか右に記されていないけれども、系図を所持する家々のうちに緒方氏の末葉と記されたものもある。その実勢ははるかに多きを加えるのである。

家系図の類は、それが何時の世代から真実を伝え信拠するに足りるかを判断することが大変に難かしい。眼光紙背に徹する明察を要する。一見したときに、信用できると思つたものが案外に間違つているものがある。その反対に、怪しいと思われたものが意外に史実と合致することを発見したりする。科学的な実証の裏づけが欲せられるのは勿論である、要するにどこから後の部分を信ぜられるかを追究しなければならぬ。しかし何といつても家系図は貴重な史料である。その信拠性を調べるのは当然のこととして、いまの場合には系図類がまず手掛りの第一歩たることは言うまでもない。その手掛りになる家系図を調べるために、右の志手文書の記事は大いに参考になる。それであるから、煩をいとわず一応左に列挙することとする。

○大友一族六十二家

大部、得永、俣見、板井、迫、須郷、吉岡、松岡利根宗像、詫摩、大野、日差、城後、岩屋、成松、冬田、奴留湯、別当、木付、志賀、長小野、小津留、久土知、椎原、海部、一萬田、豊饒、朝倉、入田、藤北、原、石合、久保、吉弘、直入、利光、田口、戸次、竹迫、波津久、日田、竹中、臼杵、津守、国東、平井、大神、挾間、清田、龜山上尾、荒瀬、田原、速見、高崎

御久里、片加瀬、立花、田北、塩手、

○緒方一族三十七家

佐伯、雄城、小原、田尻、下郡、真玉、田吹、小深田、敷戸、木上、東家、長峰、由布、賀来、徳丸、堅田、夏足、都甲、秋
岡、高城、上野、陣、阿南、筋原、森迫、種田、世利、芦刈、胡摩津留、碑田、小井手、大津留、深田、橋爪、神志那、奈須、

○諸氏百五十家

竈戸、志月、馬場、鶴成、山下、壇、賀来、石垣、荒木、谷川、白仁、卜野、鹿島、広門、坂梨子、野尻、松崎 以上十七家、
宇佐姓

右田、帆足、中島、森、田奈具、木田 原本、
木田 御手洗、魚返、野上、光永、大佐井、長野、小田、松木、古後、大田 以上十六、
家薄原姓

古荘、朽網、倉成、寒田、原尻、波多、坂折、高田、霧渡、小田原、井上、草地、永富 以上十三家藤原、
古荘一族 今村、牧、中村、広瀬

針、原口 以上六家藤原、
本庄一族 齊藤、藤井、佐保、軸丸、足田、袋、差原、川原、森下、津久見 以上十家藤原、
齋藤一族 岐部、櫛来、富来、永

松、姫島、曾根崎、何松、志手 以上八家、
紀姓 木田 同、
姓 下城、市川、京都、園分、平林、薬師寺 以上六家、
多々良姓 天江、立石 以上二家、
越智姓 善、

宮迫 以上二家、
三善姓 吉良、堀 以上、
源姓 渡辺、矢野、首藤、五郡 以上矢野以、
下三家橋姓 梶原、高山、若林、安藤、恵良、武宮、丹生、小佐井

以上八、北崎、伊美、竹田津、如法寺 以上四家、
大藏氏 井伊、江戸、岡部、宇都宮、北崎、定恵坊 三生、
氏流 江、露 以上二家、
大江氏族 税所 小野、
氏流

松武 大神姓、
阿南族 風早、葛原、幸野、小川内、恒富、玉田、重吉、田深、中尾、橋本、志村、三代、進土、久知良、長正、関、深

栖、二代、合沢、興津、志土知、江中、生野、二宮、小代、神山、龍徳、深江、長、田中、渋谷、能一、羽田方、泉原、岡屋、
津野、隈、猪野、梅木、沓懸、内田、

ところで豊後大神朝臣系図、いわゆる緒方(大神)系図によつてみると、

良臣

豊後介、大神朝臣

庶幾

大野郡大領

惟 基 大弥太

高千穂太郎 (三井小太郎)

阿南次郎、又号四穂田次郎

野尻三郎 (又佐伯三郎)

直入四郎

城原 (木原) 五郎

佐伯六郎、又称朽網六郎

稗田七郎

白杵八郎

大野九郎
マタ惟基トイウ

惟 衡

白杵大六

惟 用

白杵大七

惟 房
惟 季
惟 則
惟 顯
惟 清
惟 通
惟 平
惟 盛
基 平

惟 長
惟 隆
惟 栄
惟 時
惟 興

(田中次郎トモイフ、次男カ)

白杵次郎 (マタ白杵太郎)

緒方三郎 (大野九郎)

佐加四郎

賀来五郎

緒方小太郎

惟 久

惟 村

惟 友

惟 重

惟 時

惟 兼

野尻次郎

直江三郎

高野五郎

沼田四郎

惟 家

惟 義

惟 親

惟 武

惟 繼

右の氏姓一覽および緒方(大神)系図によつて、ほぼその大要がつかめるように、緒方一族の分布は大野川・大分川の流域と豊後水道域とに歸結するのである。もつとも有名なのは源平争覇に際しての緒方惟義(惟栄)・白杵惟隆らが兵船八十二艘

をもつて、源家に志ありとして赤間ノ関に馳せ参じたことである。あるいは宇佐神宮に乱入したこともあつて、やがて流罪の官符を下されるが、それはとも角として、彼ら緒方氏一族が内海辺陲に位置しながらもかつての海部衆の伝統をうけついでおり、もつて海上に勢力を張つていたことが想見されるのである。

くだつて豊後国田帳には、中に緒方一族の氏姓がなお散見しており、大友氏の制覇に降つても現地には勢力を温存して来たさまが偲ばれる。ことに大野・直入両郡を主としてその分布地域では神主職をしめて地方になお強固な根をおろしていたことがうかがわれる。いま田帳についてしばらく見ていく。

緒方氏の姓が緒方であることからまず大野郡からついて見たい。大野荘中村に大野太郎基直と見える。大宰管内志には「大神惟基之後九郎泰基之男也」とされているが、緒方氏は上津八満宮司（のち三代氏）であり、これは大友氏であろう。（このことについては、渡辺澄夫教授の新知見が発表されている。）

大分郡阿南荘の松武名に松尾弥三郎惟基之跡と見え、植田荘の同じく松武名に松尾弥次郎惟泰跡と見えるが、松尾氏は大神姓であり、阿南次郎惟季五代惟光称 松尾源次郎、是松尾之祖也と大宰管内志に記されている。おそらく大野郡三重郷松尾村（ここに松尾城として城址あり）に関連するものかと思われるのである（松尾は松武の誤写であるかもしれないと思つている）。同じく阿南郷則末名の御家人大津留次郎能氏は大神姓であり、阿南次郎良季之孫とされている。

これだけでもすでに明らかのように、緒方一族の氏姓が、さきの大友義鎮の時代の氏姓一覧とはひどく出入がある（そのことは前にも少しく記したごとくである）。

緒方一族の系図を詳細にわたつて、断絶・分脈・その分家などを調査するのは並大抵のことではない。さきの氏姓一覧を主として一族の伝承する家系図のみを比較・検討していくだけでも容易ではない。私もこの照合を考えながら、まだ九牛の一毛にも達せないでいる。ただここで問題となるのは、彼らが各地に占拠した本来の場所（屋敷・抛城など）がどういうところであ

つたかということだけは押えていきたいと思つてゐる。

（緒方氏の出自・発祥などについてはここにはしばらく措く。さきに半田康夫教授の考察もあり、最近には中野幡能教授がその研究を発表されたと聞いている。）

緒方氏の出自が本来大野郡にあつたとして、それが豊後水道域にも拡大したものと考えられるべきか、あるいは始めからそのような結びつきがあつたものかどうか。いずれにしても緒方氏が大野・緒方の間にあつて、その山野の精騎兵を押し、海兵団の性格をも併せもつに至つたのか、あるいはその逆なのであるかということは、緒方氏の性格を考えていくうえに非常に興味あることだと思ふ。そしてそれゆゑに、彼ら一族の本来的に占拠した地点をさぐり出すことは、そうした秘密のヴェールをはぐ一端ともなるのではなからうか。これは私なりのひそやかな想いであり、それとなく感ずる緒方氏海賊衆的なにおいである。

さきにムレとツルとについて小考をくわえたが、この問題は緒方一族の分布・占拠地点とも少なからぬ関係をもつように思ふのである。

いま、しばらく眼を大野川中流の大野郡千歳村柴山にそいでみたい。ここは豊後国岡田帳に「海部郡」と記されているところ。そして柴山八幡宮の棟札にも江戸時代中葉までは「海部郡」と記されたものが現存しているのである。岡田帳には「国領柴山村、十町、地頭戸次三郎重親」と記されている。ところでこの柴山八幡宮の秋の大祭（旧十一月三日）は、俗にヒョウタン祭りと呼ばれる古式豊かな祭りである。いま同地に伝来する柴山家系図（緒方大神と称す）により、現存する国東塔・五輪塔などと照合し、さらにこのヒョウタン祭りの儀式ともあわせ考え、そして神社に厳然と祀られる木像御神体を拝するとき柴山氏の一党が大野川畔（ツルの地）に地頭屋敷を構えて、その渡船を本来の任として司つていたらしいことが想見されるのである。柴山氏はいま流鏝馬・神輿にかかわつてゐるが、祭りの儀式も家系図に見える川畔（ツル）の旧地頭屋敷に祀る神功皇后を拝することから始まつて、崖上の新屋敷の地頭神を拝し、ついで柴山八幡宮に及ぶのである。この点は歴史的発展、神

を祀る氏神の氏から土地への發展を、素朴なうちに端的に示してくれるものがある。いまはこれに詳しくふれる余裕がない。ただ大野川畔に旧地頭屋敷があつたこと（鎌倉時代初頭からという）が、これがたまたま柴山氏が緒方氏系であるにとどまるのか、あるいは緒方氏本来の性格の一端を示すものであるかに、私の強い関心が存するのである。大野川下流の徳丸氏の地は西に大津留、北に鶴がある。いま大分川下流の挾間に鶴田、植田には胡麻鶴あり、雄城の前は小野鶴であつて、いずれもツルと結びつく。さらに今夏の精密な調査を期しているがツル（渡シ場）との関係で同様なことが言えるかと思つてゐる。

しかし、これらは海に面し、あるいは川畔に位置するがゆえの、当然な社会的勢力の様態かもしれない、臼杵・佐伯家などの分脈は当然のことであるが、問題は緒方氏本来の性格である。とはいふものの、やはり緒方本家の根拠地が緒方三社とむすび、いずれも大野川畔にある（緒方・犬飼）というその位置が問題とされるべきであろう。そして私にはどうしても海賊衆の性格と無縁には思われないのである。

(2) 緒方氏と海部

緒方氏（大神姓）が宇佐大神氏の出自であろうとする所説には首肯させるものがある。大神をオウミワと読まずにオウガとすること（その大蛇神婚譚は大三輪伝説に極似）、そして緒方庄が宇佐八幡宮の最も古い神領の一であることなどである。なおこのほか私としては、緒方氏の家紋がそれを示していることをつけ加えておきたい。史上たまたま大蛇神婚譚があまりにも有名であるために、いわゆる魚鱗の紋のみがもてはやされるが、同時に緒方氏の家紋は三ツ巴紋であつて、これは宇佐八幡宮系の諸氏にも用いられているところ（国東半島沿岸の水軍衆においてもまた同じ）。この点からしても緒方氏が宇佐大神氏の一族であろうとされるのである。

ところで、ここに問題としたいのは緒方氏が水軍衆として活動した基盤は如何とということである。大野川上流の山中部なる大野郡緒方庄を中心として、周辺地域にひろく分布するに至つたとされる緒方氏一族が、むしろ海賊衆としての強勢を誇つた

ことは、あまりにも著名な史実である。かの源平の争覇戦に際して（長門壇ノ浦の戦）、白杵ノ二郎惟隆・同弟緒方ノ三郎惟栄・同弟佐賀ノ四郎惟憲らが源家に志をよせたことが「豊後の船だにもあらば安事なり」と言われしめ、八十二艘の兵船を献じて活躍したとされている（吾妻鏡・玉葉・後愚昧記による）。これについて私は、緒方氏と豊後水道域の海部衆との結びつきを考えてみなければならぬと思つてゐる。

白杵・佐伯・佐賀（佐賀ノ関半島の付近）などのいわゆる海部衆が、なぜ緒方氏を頭梁と仰いでその配下に入つたか。緒方氏がこれらの水域を制し得たのにはいかなる事情があつたのか。こういう点については大いに想像の翼をひろげなくてはなるまいが、私としては緒方氏の發祥にまつわる大蛇神婚譚こそが、じつはこの秘密を解くカギの一つたる役割をもつてはなからず、ひそかに考えをめぐらしている。すくなくともこの大蛇神婚譚が、海部衆をして緒方氏の支配下に入ることをスムーズならしめた一つの要因たり得たものであつて、そういう社会心理的な地盤が海部の民のうちに存したのではないかと考へてみたいのである。

民衆は、ことに海賊衆は、彼らの記録を残さない。したがつて当地域に残存する伝承のうちにそれを探ることは出来ないであらうかとおもう。しかしこのことは大胆な推測を必要とする。今は私なりに推論をすすめてみたい。

豊後水道域に面する海部（いま南・北海部郡）の地が、古来より海部衆として「海の民」であつたことについては云為すまでもない（羽原又吉「日本古代漁業経済史」など）。あるいは日本神話における海ノ幸彦・山ノ幸彦の海宮説話が、いまも佐賀ノ関半島南岸の地に伝承されている。あるいは神武天皇の御東征にまつわる伝承は、佐伯から佐賀ノ関にいたる海部郡の各地に数多くのこつている。「船祭り」の行事も、これらの地になお盛んに見られるところ。これらの伝承についてはしばらく措く。当地域は、同時に憑きものの多数地帯としてすばらしい宝庫でもあるのだ。南・北海部郡と大野郡には、とくに犬神（インガミ）とヘビ神（トウベ・トウビ）について注目すべき伝承を多くのこしている。それはこうである。

まず犬神の伝承について言えば、①当地域におけるものは、目に見えないが小さな鼠ぐらいの三本尾の白黒のブチになつて

いる犬だという。それを家の床下にカメ（ツボ）に入れて、米食させて飼うとのこと。そしてこの犬神は、弘法大師が中国から帰つてくるときに中国からついてやつて来たものであり、大師が向う脛にかくして持ち帰つた米をくわえ出して歩いて歩いたから、それで日本中に稲作がひろまることになつたのだ、と伝えられている。

これに対して、②中央セト内の四国方面では、犬を生きながらに埋めて頭だけ出し、その前方に食物をおき、犬が飢えにつかされた頃を見計つて首をはね、その首をまつたと言われている。これが豊後では国東北部から姫島にかけて伝えられている。

また一説には、⑧弘法大師が四国を巡錫したとき、一夜の宿のお礼にとて野猪の害を止めるため、紙に何かを書いて封じて渡した。それつきり猪の害はとまつたが、あまり不思議に思つてその封じ目を開いたところ、一匹の犬が描いてあるだけだったがそれが紙からぬけ出して犬神となつたというのである。これも四国伊予の伝承である。

また、④四国の香川県では、むかし島の人が浜で汐汲みをしている時、ヒシヤクに入つて上つたのに始まる、という伝えもあるそうである。

これらの犬神は憑きものとされ、その家の女性が嫁に行くとき付いていくとか、またその人が死ぬと体に犬の歯型がついているとか言われている。

右によつても知られるように、地方によつてその伝承にはなほだしい相違がみられる。中央セト内では弘法大師との結びつきが強く感ぜられるが、これは四国の特異性とも言えるであろう。あるいは海からやつて来たという伝承に古さが感ぜられるが、これには豊後の海部・大野地方のそれがより古い原型を伝えているように思われる。海部の伝承にも弘法大師がでてくるが、そして同地にも大師の巡錫・宿泊の跡と伝えられるところが二三にとどまらないが（最近、古い人骨が発掘された聖岳洞穴も、その一である）、これは四国の伝承の影響をうけて結合したものではあるまいか。そしてこの海部の伝承が、はるかに古い時代に中国南部の民（犬トーチムをもつた民族）が、稲の伝来をもあわせて、海をこえて渡来したという歴史的事実を反映するものかどうか。その点はしばらく措くとしても、少くとも海部の伝承のうちにそういう痕跡が認められることは考えて

よいのではあるまいか。

これについては、蛇神の場合にも同様なことが言えそうである。

中国の山陰地方および中央セト内の山陽・四国地方で、トウビョウ・トウバイ・トンベなどよばれ、豊後水道域の海部（いま南・北に分れる）・大野郡の地域ではトウベ・トウビなどとよばれているものがそれである。長さ五六寸の小さな、くびのところに金環（黄輪）のある蛇で、これを小さなカメに入れて床下に飼うという。食事として米をやつたり酒を注いだりする。柳田国男氏は、お酒がこの神の第一の好物だ、と記されている（「おとら狐の話」）。

その伝承として、四国の場合にはむかし海岸に長持が一つ漂着した。漁師たちが争つてその配分権を主張したが、開けてみると中から蛇がいつぱい出て来て、それぞれの漁師たちの家に入りこんだという（海から上つたという点で、犬神の④の話によく似ている）。

これに対し豊後の海部地方では、さきの犬神のときとよく似ていて、大陸から渡つて来たことがはつきり伝承されている。すなわち、むかし弘法大師が中国から帰つたとき、荷物の中に入れてやつて来たというのである。

蛇の皮を財布に入れたり、また蛇皮の財布をもつていけば、金銭がいつも絶えないという伝承は、ひろく行われている。

ところで「日本紀」皇極三年の条には、有名な常世神出現の話がある。橘の木に生ずる長さ四寸ぐらいの、蚕に似た虫を祭つて、致富・不老を護り、常世神とした説話である。

蛇神はミミズぐらいの大きさでありながら、これをミミズといわずに蛇としたところに問題がある。犬神の場合にも鼠ぐらいの大きさだとしながら、これを犬だとしている。また石塚尊俊氏によると、本来は中国からの伝来であろうとされ、晋の干宝が「搜神記」第十二巻に、犬蟲および蛇蟲のことが見え、蛇神の話はことに中・四国に伝承されるものとよく似ていると言われている（「日本の憑きもの」）。トウビョウのトは蠱であるとされ、ツポ（カメ）に入れて養うことも符合するが、犬神にしても蛇神にしても同じく憑き物ではあつても、狐や狸などの場合とはよほど状況が異つており、これだけは少くとも大

陸伝来のものではないか、と石塚氏は主張されている。

そしてこの場合、中・四国地方のそれと比べて豊後（海部・大野）のそれは、同じく憑きものとして作用しながらも、むしろ幸福をもたらす守護神として祀るといふ古い原型を伝承のうちに示しているように思われる。この点において海部の地域のトウベ（トウビ）には、出雲の龍蛇信仰（十月、これを龍宮からの使とする）とも一脈通ずるものがありそうにも思われるが本来的にはやはり中国大陸から渡来したという伝承のうちに、むしろ東南アジアの蛇トータムの、ないしは龍蛇が王権とむすびついている古伝承（山本達郎教授「安南史の研究」にくわしい）の痕跡をのこしているものがあるように思われる。（かるがゆえにこそ、緒方氏の大蛇神婚譚が大三輪伝説の形をとり得たものでもあらう。）――

閑話休題。本論にもどらう。

緒方氏の発祥を物語る大蛇神婚譚（「源平盛衰記」にくわしい）に注目すべき点がいくつかある。まず、日向国東臼杵郡塩田（いま宮崎県延岡市内、豊後国海部郡に隣す）の長者の娘花本姫のところへ祖母山に住む大蛇神が通つて来たと言われている。

祖母山はもとともソウルにつづまつたものであるらしいことは、その西麓の日向国西臼杵郡とも五箇所村に、添利・山神社があることによつても察せられる。これが朝鮮古語で神聖なるところを指すことは、いま韓國の首都（京城）がソウルとよばれることから分明であらう。このソウルがつづまつて祖母山となり、（一名姥岳とされる）、建男霜凝日子神と豊玉姫とを祀つてゐる。ここに豊玉姫が祀られ、海部の地域に神武天皇の伝説が濃厚であるとすれば、日本神話における海宮説話に見える龍蛇（ないし大鰐）との結びつきがなされるのも当然のことであらう。

かつ宇佐八幡宮の主神たるヒメ大神は玉依姫であるとされているのである。（緒方氏が宇佐大神氏の出自であるとすれば、このことはより強い意味をもつて来るであらう。）

豊後国の海部（いま南・北海部郡とす）および大野郡、それに南接する日向国臼杵（いま東・西臼杵郡とす）の地を支配するに至つた緒方氏の発祥をめぐる物語りが、これらの地域に伝承する蛇神（トウベ・トウビ）の中国的（とくに東南アジアの

蛇トーテムないし龍蛇信仰的)性格と、祖母山・豊玉姫にかかる龍蛇神とを媒介として、かりに大三輪伝説の形をとつた大蛇神婚譚として示されることとなつても不思議ではない。したがつて、この大蛇神婚譚にはつとめて作爲的なにおいが存するとしても、海部・大野の民のうちにトウベを神聖な守護神とまつるトーテム的な信仰がみられるという社会心理的な地盤が存するとき、この神婚譚は緒方氏の尊貴性の主張を裏づけるとともに、彼らの支配者たる地歩(王権)を確立するに際して、きわめてスムーズにかつ有力にはたらいたものと思われる。この際、花本姫の出自が日向国塩田の長者であるという(海部に南接する海岸である)位置の問題も、彼らにとつて強く作用したことであろう。

ことに普通の場合には、死後にその人の体に痕型がのこるとされるのに拘わらず、緒方惟栄その人には生前に蛇の鱗の痕型が見られたと伝えられる。まことに英雄(王者)出現の裏づけを如実にみせられる思いがする。そのみでなく、ずつと後代になつての、大友義鑑に誣ぼされた佐伯惟治(惟栄の末葉)が南海部郡の各地に祀られて、富尾権現(尾形を富ます意だといふ。富尾・鴟尾とも書く、トビ権現)とされていることにも窺えるのではなからうか。悲劇の英雄たる惟治を富尾権現トトビトウベ・トウベトウベ蛇神の再来として祀る心事にも、この間の事情を明らかにみせられると思う。

緒方大神氏の発祥を示すという大蛇神婚譚が、このような尊貴性・王者たる主張を裏づけ、緒方惟栄の身体に大蛇の鱗の痕型が見られ(それが家紋とされ)、さらに悲劇の死をとげた佐伯惟治また富尾(トビ)大権現と祀られるところに、トウベをトーテム的な守護神としたらしい海部の民たちと緒方氏との強い結びつきを感じるのである。ただこれがどこまで実年代を遡りうるか(ひいては緒方氏の出自)の歴史的究明は、また別の問題である。しかしとにかく惟栄の時代においては、すでに右のごとくにして強固な結びつき支配関係が見られると考へたい。

〔註〕なお、母牟礼山の西南麓(いま弥生村)に門田がある。(近く深田・久土などもあり)。この門田のすぐ西に接するよ
うに水銀鉞の坑あとがあるのは注目される。これについては近く調査したい。なお、惟治のことについては増村隆也
氏「佐伯郷土史」にくわしい。

(未完)

(一九六三・八・一)